

まえがき	藤澤信照	3
念仏の風光	念仏の白い息している	9
	ほくほく生きる	18
人生のこもれ日	このいのちを考える	29
	ことばの持つ重さ	39
	いつでも どこでも どんなどきでも	45
	回向を首としたまひて	51
妙好人のことば	浅原才市さんの世界	67
	足利源左さんの風貌	80
	信心やぶれず	98
あとがきに代えて	百六十二貫、音色よし	104
	「いのち華やぐ」思いを胸に	107

念仏の白い息している

二十二歳の若さで白血病に倒れ、妻との別れを余儀なくされた上に、病室で幼子を育てながら、ひたむきに自由律俳句を書き続け二十五歳の若さでこの世を去った、住宅顕信すみたけけんしんという俳人がいました。

彼は、岡山の調理師学校を卒業したあと岡山市役所に勤めたのですが、その頃から仏教に深い関心を持つようになり、遂に浄土真宗本願寺派の僧侶を育成する専門学校である、中央仏教学院の通信教育を受講することに決めたのでした。ここで、彼は仏教の基礎を学び、浄土真宗の教えに触れることによつて僧侶になる決心をして、一九八三（昭和五十八）年七月、二十二歳のときに得度とくどをしたのです。本願寺で彼はご門主から「顕信」という法名をい

ただいたのですが、爾来、彼は親によって命名された春美という本名をまったく用いることなく、生涯、「住宅顕信」という名前で通したのでした。

得度を終えて帰宅するなり、彼は自宅の一部を改築して「無量寿庵」という仏間をつくり、若い人たちとともに仏法を語る場所にしたと思ったことでした。十月には結婚して新しい人生が始まったのです。

しかしあろうことか、彼は翌年の二月に急性骨髓性白血病と診断されて、岡山市民病院に入院することになったのです。そのために、妻の実家の強い要請で離婚をしなければならなくなり、その上長男が生まれたので、その幼子を引き取ることになったのです。彼は、病室で自分の病気の療養と、病院の好意で病室に置かれたソファの上で育児を始めたのでした。家族が幼児を引き取ることを申し出ても、自分の生きがだからと断り、常に自分のそばから子どもを手放さなかつたようです。幸いに妹が同じ病院で看護師をして

いたので、折りをみては育児の手伝いをしていたということでした。

顕信は、自分の病気や育児のために苦しんで身も心も疲れ切ってしまったなために、かねてから興味を持っていた自由律俳句に取り組むことにしたのでした。早速、俳誌『層雲』に入門し、山頭火や井泉水の作品を繰り返し読み続けました。とりわけ放哉の作品に心酔した彼は、『尾崎放哉全集』を購入してぼろぼろになるまで徹底的に読み込んだと言われています。彼は同じ本を再度注文して、自分のベットのそばに置いたようです。ひたむきに俳句と取り組むことによって、彼の作品は短時間の間にすばらしい成長を遂げたのでありました。その頃の作品の中に、

たいくつな病室の窓に雨をいただく

『住宅顕信俳句集「未完成」』四頁、春陽堂刊

少しなら歩いて朝の光を入れる

（『未完成』六二頁）

というものがありません。いずれも静謐せいひつな抒情じょじょうが感じられて、とても好ましい作品です。中には、

念仏の口が愚痴ゆうていた

（『同』二二頁）

という句があつて、私は思わずわが胸を言い当てられたような気がしたことでした。また子どもが少し歩き始めて片言かたことが言えるようになったのを見て、

かあちゃんが言えて母のない子よ

（『同』一五一頁）

の句には、揺れ動く彼の心情が見えるし、

ずぶぬれて犬ころ

（『同』二二二頁）

には、その光景が的確に表現されています。

若さとはこんなに淋しい春なのか

（『同』一二八頁）

をみると、彼の切ない心の襞ひだを見る思いがしたことでした。

顕信に遅れて『層雲』に投句を始めた、岡山大学環境理工学部の池畑秀一教授は、その頃大学の研究室におられたようですが、一度ぜひ会いたいという電話を受けて病院を訪ねました。そのとき、彼は開口一番、「私は本願寺派